

「律法に死に、新しい御霊によって仕える」

ローマ7：1－6

堀田修一 23・4・23

ローマ7章のテーマは、「キリスト者と律法の関係」。この7章は、主を信じた後も罪と戦う誠実なキリスト者にとり非常に興味深い箇所。7章後半のパウロが自分の心に住む罪との赤裸々な戦い、悩みの告白：15－21は、すべてのキリスト者の地上での真実な姿を教えている。罪との戦いを続けているすべてのキリスト者に大きな励ましと共感を与える7章です。6章と神の恵みの高嶺の8章の間に7章があるのは神の見事な配慮→神の律法により自分の罪が示されて初めて、神の救いの恵みの素晴らしさが分かる！「罪の（自覚）の増し加わるところに、恵みも満ちあふれました」5：20

I 「律法が人を支配するのは、その人が生きている期間です」：1。律法（や正しい法律）が人に対して権限を持つのは、人が生きている期間だけです。パウロは、この事実を説明するために、結婚した女性の例話を語る→「結婚している女は、夫が生きている間は、律法によって夫に結ばれています。しかし、夫が死んだら、自分を夫に結びつけていた律法から解かれます。したがって、夫が生きている間に他の男のものとなれば、姦淫の女と呼ばれますが、夫が死んだら律法から自由になるので、他の男のものとなっても姦淫の女とはなりません」：2－3。結婚している女性は、ここではキリスト者を指す。その女性には夫、つまり「律法」がいる。この女性は、夫（律法）が生きている間は夫に縛られているが、夫が死ぬと夫から自由になる。夫の死後に別の男性と再婚しても、それは問題にはならない。この例話には説明が必要。キリスト者は、律法とは死別したので、律法からは自由である。但し、この箇所では、二つのことの確認が必要である。

① 律法が死んだり、亡くなったわけではない。実際に霊的に死んだのは、律法ではなく、女、つまり私たちキリスト者のほうです。律法が消滅したり、無効になったりしたのではない。「わたしが律法や預言者（旧約聖書）を廃棄するために来た、と思っってはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです」（マタイ5：17）。12節でパウロは、「律法は聖なるものです。また戒めも聖なるものであり、正しく、また良いものです」と語る。それ故、律法それ自体の役割は残っている。それは、私たちにとり有益なものです。私たちはなおも十戒を真剣に学ぶべき。そこには私たちの人生への神の基準、道しるべがある。

② 私たちはどのように律法に対して死んだのか。4節前半に答えがある→「あなたがたもキリストのからだを通して、律法に対して死んでいるのです」。主のからだは、確かに十字架につけられた。主を信じた時私たちも主と霊的に結合し主と共に死んだ。私たちは主にあって死んだ者です。ここに聖書が語る主との霊的一体化という教理がある。私たちは、その恵みを毎月の聖餐式の中で経験している。私たちが裂かれたパンを食べるとき、主の死にあずかっていることを視覚的に覚える。「私たちが裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか」（Iコリント10：16）。主のからだにあずかるとは、主がそのからだにおいて経験さ

れたすべてのことを共有すること。主の死と復活を共有すること。実に「キリストは、私たちにとって…義と聖と贖いになられた」(1:30)。主を信じた時に、私たちは主が経験されたすべてを共有した。主の死とも共有し主と霊的に結合し主にあって私たちは死んだ。その時、律法との関係も解消された。もはや律法は私たちに対して何も要求する権利はない。主が律法を完全に守られ、主が私たちを律法の要求から解放された。主の恵みに感謝し、みことばに従う。

II もう一つの大切な積極的な恵み、新しい人生→

1. 「それは、あなたがたがほかの方、すなわち死者の中からよみがえった方(主イエス)のものとなり、こうして私たちが神のために実を結ぶようになるためです」: 4。私たちが、主にあって律法に死ぬのには目的がある。それは「ほかの方」つまり、死者の中からよみがえられた方=主イエスのものとなるためです。主が花婿、私たちは花嫁。キリスト者は、素晴らしい主イエスと霊的な再婚をして、「配偶者が新しくなる」恵みの人生に入れられた。その前まで、私たちは、完全に正しい夫(律法)と結婚生活を送っていた。その夫、律法は厳格で様々な要求をし、失敗すれば、罰を加える人だった。そのような夫、律法のもとで、妻(私たち)は自分の足りなさに自己嫌悪をしている。妻、私たちは、律法に支配され、律法に完璧に従うことを要求された。しかし、この関係は、律法の要求を完全に全うされた主の十字架の死で終了した。替わって新しい恵みとまことに満ちた素晴らしい夫の主イエスが与えられた。ハレルヤ!この主との再婚により、私たちはもはや律法に縛られることはなくなった。むしろ、自分が誰に所属しているかが大切。以前の私たちは、いやいやながら義務感だけで夫、律法に従おうとしたが、喜びのない敗北の人生だった。しかし今は、自分を愛し、十字架で死に、復活された素晴らしい夫の主イエス様に喜んで従いたいという新しい心をいただいている。新しい夫の主と結ばれる(主と霊的に結ばれ、愛と聖と赦しの養分をいただき続ける)という新しい人生。それは、主のいのちと愛と力によって神のために実(愛、喜び、感謝、平安、寛容、赦し、神と人に仕える謙遜、主の恵みから生まれる伝道)を結ぶ人生に変えられ続ける。それは、自分の力で律法を守ろうとする人生ではない。律法は、基準を示しても、それを実行する力を与えてくれない。真の喜びと力は、主イエスと深く交わり、主を深く知り続け、主にしっかりと結びつく、とどまる事によって与えられます。主は言われた→「人がわたしにとどまり(つながり)、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実(神と人を愛する愛、喜び、平安、寛容、赦し、恵みから生まれる伝道、神の栄光を現す歩み)を結びます。
2. 「しかし今は、私たちは自分を縛っていた律法に死んだ(主と霊的に結合し、主にあって律法に死んだ)ので、律法から解かれました(主が律法を完全に守り成就されたので)。その結果、古い文字にはよらず、新しい御霊によって仕えているのです」: 6。旧約時代は、イスラエル民族に与えられていたのは文字による律法だけだった。それは外側から人々に語りかけ、生きる基準を示し、命令を与えました。しかしその文字の律法は、それを守る力と人の心の内側を変える力、いのちを与えることは出来なかったのです。イスラエル人は、文字、律法の正しい基準を持っていても、それを自分たちの力で守ることが出来ず、罪深い者となり墮落して行きました。私たちも、文字という律法、戒めだけなら、ただ窮屈な人生で、霊的ないのちのない文字としての律法を喜んで守ることは出来ないのです。神は、人間の弱さをご存知で、アブラハムと結ばれた契約は永遠の契約です→「アブラハムは主を信じた。それで、

それが彼の義と認められた」創世記15：6。「アブラハムへの祝福（信仰により義と認められ救われる祝福）がキリスト・イエスによって異邦人（全世界の人々）に及び、私たちが信仰によって約束の御霊（文字、律法によらず、御聖霊の新しいいのちと力により神に感謝しつつ従わせて下さる助け主）を受けようになるためでした」ガラテヤ3：14。神は、かつてモーセを通して律法を与えられたが、新約時代は、主イエスを通して新しい律法、つまり御聖霊を私たちの心に与えて下さいました。主を信じ御聖霊により、心を新しくされ、聖霊の力と愛と神の恵みへの感謝をもって聖霊が記者たちに働かれ完成した聖書のみことばに生きる幸いに入れられるのです。この地上では、私たちの心は変えられ続けますが完全ではない。自分の力ではなく、聖霊の力と主の恵みへの感謝をもって神に仕えましょう！